

中国江南呉語地区の劉猛将信仰と賛神歌（特集 信仰伝承と音楽）

著者	鄭 土有, 高倉 健一
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	28
ページ	166-178
発行年	2013-11-30
その他のタイトル	Religious Songs and Liu Mengjiang Faith in Wu Speaking Regions of Jiangnan, China
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123541

中国江南呉語地区の劉猛将信仰と賛神歌

鄭土有[※]

高倉 健一訳^{※※}

1. 劉猛将信仰の縁起と地域分布

劉猛将信仰は中国伝統農耕社会の重要な民間信仰の一つであり、驅蝗神（蝗害除けの神）として劉猛将を祀る信仰である。清代の方志の随筆や現代の研究によれば、一般に劉猛将信仰の起源は江淮地区で、江南呉語地区において盛んに信仰されている。

劉猛将は民間では「劉王」「普佑上天王」「吉祥王」「劉王老父」「劉王菩薩」「劉阿大」などと呼ばれている。以前は呉語地区の各地の農村で劉猛将の像が祀られており、その多くは坊主頭で足が赤く、半袖短ズボン姿の少年のようないでたちであり、あるものは頭に赤い頭巾を巻いていることから「頭巾猛将」と呼ばれている。他にも比較的背の高い成年文官もしくは武官のいでたちをした猛将像もいくつかあり、文官のいでたちは朝服で腰に玉の付いたベルトを巻いており、武官のいでたちでは武將の甲冑を着て手には宝剣を持っている。現在の民間廟で祀られている劉猛将の多くは官員の形態であるが、文官か武官の区別は難しい外見となっている。

劉猛将の原型や来歴に関する話はまちまちである。清代の袁景瀾の『吳地岁华纪麗』の中では、「按《怡菴杂录》：‘猛将谓宋名将刘武穆谥。’王鏊《姑苏志》亦同。郡志称：‘谥弟刘锐为谥统制官，尝为先锋陷敌，退老平江，旱蝗为灾，禳除有效，歿为神。’《一统志》云：‘刘承忠，元末指挥，殉节投河，民立庙祀之。雍正间建庙顺天府，州县多有其祠。’《居易录》为刘宰。俗又传作刘翰。翰字仲偃。」¹とある。ここからは、江南呉語地区の民間にある劉猛将の原型に関する文献記述には5種類の説話があることがわかる。

第一は、宋代の名将「劉錡（1098 - 1162）」が原型という説である。『宋史』三三六卷では字を信叔、宋の順德軍（現在の甘肅省靜寧県）の人とある。清代の姚東升の『釋神』第四卷『灵泉笔记』に「宋景定四年（1263），封刘錡为扬威侯天曹猛将，有敕书云：‘飞蝗入境，渐食嘉禾，…民不能祛，吏不能捕，赖尔神灵，剪灭无余。上感其恩，下怀其惠。’²と記されている。『宋史』によると劉錡は姿が猛々しく弓が上手で、声が大きいとされている。南宋時代の紹興十年（1140）、劉錡は東京副留守に任ぜられ、韩世昌や岳飛らと並んで「中興名将」と称された。紹興三十一年（1161）、金の主完顔亮が兵を率いて南下したため、劉錡は江淮浙西制置使に任命されて揚州に駐屯して金の兵と戦い、翌年病死した。

※復旦大学中文系教授

※※神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程

第二は、宋代の劉銳という説である。清代の顧震涛の『吴门表隐』第一卷に「瓦塔在宋仙洲巷吉祥庵。宋景定间建，即大猛将堂。神姓刘名锐，端平三年，知文州，死元兵难……其封神敕命碑在灵岩山前丰盈庄，宋景定四年（1263年）二月正书。」³と記されている。康熙二十三年（1684）の『江南通志』第二十三卷には「猛将庙，在府治（指苏州府）中街路仁风坊之北。景定间（1260-1265）因瓦塔而创。神姓刘名锐，或云即宋名将刘锜弟。」と記されており、『宋史』四四九卷にも劉銳の名があり、「刘锐，知文州。嘉熙元年，北兵来攻，锐与通判赵汝鼎乘城固守，率军民七千余人昼夜搏战，杀伤甚多。拒守两月余，援兵不至，城中无水，取汲于江。会陈昱以去岁失守沔，编置此州，夜逾城出降，献女大将，失以虚实，敌遂增兵攻城甚急，一夕移江流于数里外。锐度不免，集其家人，尽饭以药，皆死，乃聚其尸及公私金帛，告命焚之。家素有礼法，幼子同哥才六岁，饭以药，犹下拜受之，左右为之感恻……锐及其二子自刎死，军民死者数万人。」⁴と記されている。ここには劉銳が劉錡の弟という記載は明記されていない⁵。

第三は宋代の劉翰という説である。『宋史』には、靖康元年（1126）、「金兵抵城下」，刘翰“为京城四壁守御使”，“遣使金营”。金人逼刘受官，刘“归书片纸曰：‘金人不以予为可用，夫贞女不事二夫，忠臣不事两君。况主忧臣辱，主辱臣死。以顺为正者，妾妇之道，此予所以必死也。’即沐浴更衣，酌卮酒而缢。……建炎元年，赠资政殿大学士，后谥曰忠显。”⁶と記されている。

第四は宋代の劉宰という説である。『宋史』によれば、劉宰は字を平国、号を漫塘と言い、「学术本伊洛，文艺过汉唐」，为人刚正严直，明敏仁恕。任江宁尉、泰兴令时，“凡可以白于有司，利于乡人者，无不为之”。他死后，乡人扶棺相送，绵延五十里，“人人如哭其私亲”⁷とある。

以上の4人の猛将神は劉宰を除いて国靖節の民族的英雄である。史料によると、南宋時代の景定四年（1263）に劉錡は「揚威侯天曹猛将」に封ぜられ、その十数年後（1276）に元の兵が南宋を滅ぼし江南を占領したとある。呉越民衆の劉猛将に対する祭祀には民衆の民族英雄に対する想いが自然と反映しているのである。

最後のひとつ、第五は元代の劉承忠という説である。清代の乾隆増の『大清会典』には、劉猛将は「驅蝗正神」であり、その主神は劉承忠であると記されている。

これまで述べた文献とは異なる第六の意見として、呉語地区の民間に広く伝承されている「放牛娃」だという説がある⁸。これと似たような伝説が浙江省や江蘇省一帯に広く伝わっており⁹、主な筋立てはほぼ同じでおおよそ次のような内容である。劉猛将の名前について村人は追究しない。前述した「劉阿大」以外にも神歌や宝卷の中で必ず「劉王老父」や「劉仏官」、「劉仏」等の名前と交代され、これらの名前はすべて神仏を信仰する村民の子供の名前が使われる。

劉猛将信仰が発生した年代はいまだ未確定である。清代の姚東升の『释神』第四卷『灵泉笔记』や姚福鈞の『铸鼎余闻』第三卷『怡庵杂录』、顧震涛の『吴门表隐』第一卷や康熙二十三年（1684）の『江南通志』第二十三卷には、南宋時代の景定四年（1263）に劉錡が「揚威侯天曹猛将」に封ぜられ、蝗害除けの能があると記載されている。蘇州の吉祥庵（中街路道仁風坊の北に位置する劉猛将を祀る庵）は、景定間（1260 - 1265）に瓦塔で作られたとされているが、これを証明する宋代の文献はなく、元代史料にも関連する記載はないため真偽は定かではないが、少なくとも

明代には江南地区にすでに比較的流行していた。明代の『王穉登集』第四卷『吳社篇』には、「凡神所栖舍具威信、簫鼓、杂戏迎之曰‘会’。……会有‘松花会’、‘猛将会’、‘关王会’、‘观音会’。松花、猛将二会，余幼时犹及见，然惟旱、蝗则举。」¹⁰とある。この記載は現在見つかった劉猛将に関する文献記載の中で最も早い時期のものである。

劉猛将信仰は明清時代に河北地域、江南地域に広く伝播した。清代の雍正二年（1724）、時の直隸総督の李維鈞は、畿輔地方は毎年蝗害が出るが、地元の民は劉猛将の廟に祈祷して蝗害を除けていると上奏している¹¹。また彼は河北省永年県の劉猛将廟の『將軍廟碑文』の中に、「庚子（1720、康熙五十九年）仲春，刘猛将军降灵自序：‘吾乃元时吴川（在今广东）人。吾父为顺帝时镇江西名将，吾后授指挥之职，亦临江右剿除江淮群盗。返舟凯还，值蝗孽为殃，禾苗憔悴，民不聊生。吾目击惨伤，无以拯救，因情极自沉于河。后有司闻于朝，遂授猛将军之职。荷上天眷念愚诚，列入神位。’将军自述如此。乙亥年（1695）沧、静、青县等处飞蝗蔽天，维钧时为守道，默以三事祷于将军，蝗果不为害。……将军之神力赖圣主之褒敕而直行于西北，永绝蝗之祸，其功不亦伟欤！将军讳承忠，将军之父讳甲。」¹²と記している。そして、甲辰（雍正二年、1724）の春に江南、山東、河南、陝西、山西の土地柄の良い場所を選んで廟を建設させるよう通達した¹³。清代の乾隆増の『大清会典』には、劉猛将は「驅蝗正神」であり、その主神は劉承忠とある。嘉慶間監修の『大清通礼』第一六卷『祀礼』には「猛将军刘承忠，于各省府州县致祭之礼：每岁春秋所在守土正官具祝文、帛、羊一、猪一、尊一、爵三，陈设祠内如式。质明、守土正官一人，朝服诣祠，行礼仗节与直省祭关帝庙同。」とあり、清代中期以降、劉猛将は絶えず封ぜられていた。咸豐七年（1857）に劉猛将が封ぜられたことに加え、光緒十二年（1886）には全ての劉猛将は「保康普佑显应灵惠襄济翊化灵孚刘猛将军」に封ぜられた¹⁴。祭祀規格は関聖大帝と同格であった。

中華民国期以後、華北地区の劉猛将信仰は次第に弱くなった。江南吳語地区でも1949年から1980年代まではしばらく停滞していたが、今日までに信仰は再び盛んになってきている。調査状況からみると、吳語地区である江蘇南部の蘇州、常州、無錫と鎮江の一部地区や、浙江北部の嘉興、湖州等、および上海の青浦、嘉定、松江地区では最も流行しており、これらは多くが太湖周辺域に属している。

2. 吳語地区の劉猛将信仰の祭祀儀式

吳語地区の劉猛将信仰は清代の地方文献においてよく見られる。『清嘉録』は蘇州地区の歳時風俗志で、そのひとつ『正月』巻の民俗の項にある『祭猛将』には、「（正月）十三日，官府致祭刘猛将军之辰。游人群集于吉祥庵。庵中燃铜烛之，大如栝橈，半月始灭，俗呼‘大蜡烛’。相传神能驱蝗，天旱祷雨辄应，为福畎亩，故乡人酬答尤为心慊。前后数日，各乡村民，击牲献醴，抬像游街，以赛猛将之神，谓之‘待猛将’。」とある。顧震涛『吳門表隱』の中にも同じような記録があり、これらからは当時は民間信仰として非常に流行していたことが見える。しかしながら、他の民間信仰と同じく1949年以降の迷信打破によって多くの廟が破壊され、信仰が以前のように流行することはなくなった。それでも劉猛将信仰の吳語地区の民間信仰への影響は大きく、

1980年代以降は迅速に回復し、例えば浙江省嘉興蓮泗蕩の劉王廟や江蘇省吳江市芦墟鎮の劉王廟などでは、多くの信者や旺盛な香火を見ることができる。

フィールド調査から、劉猛将信仰の空間形態には主に廟祭と家祭の二種類があることがわかった。まず、廟祭は廟の中での祭祀活動を指し、それは専門廟と付属廟に分けられる。付属廟とは劉猛将がその廟の主神ではないが、像が敷地内に供えられている廟である。例えば上海市青浦区金沢鎮の楊伯廟（俗称：楊老爺廟）がこれに当たる。専門廟は劉猛将が主神である廟で、劉王廟（比較的規模が大きい）と猛将堂（規模が小さく一間小屋程度）のものがある。家廟は信者の家の中に劉猛将の神棚を設けて朝晩供えものをするもので、その数は多くない。

劉猛将の祭祀期間には臨時的な祭祀と固定的な祭祀の二種類がある。臨時的な祭祀は、時期が決まっておらず、通常は病気を罹ったり生活の中で困難なことが起きたりした際に廟へ行って劉王に加護を求めたり、神歌歌手を家に呼んで「常規」歌唱会をおこなうものである。常規または跑台とは、所属する民間信仰組織「社」内の構成員間で行うもので、例えば構成員が家を造ったり、発病や礼拝活動などで常規を行うと届けた際にはその他の構成員は必ずそれに答えて参加する。参加者には費用はかからず、開催人が参加者の食事やお供え物等を準備するというものである。常規と似たものに赴堂会というものがあるが、こちらは構成員以外の者も参加し、参加者から一定の参加費を集める形式となる。

固定的な祭祀には春と秋の廟会が主として挙げられる。春に豊作を神に祈り、秋に豊作を神に報告するのは農耕祭祀の特徴である。驅蝗神は農神に属しており、農神としての性質も備える。具体的な祭祀時期は各地域によって異なるため、異なる廟を礼拝するうえで便利である。

以下は近年香が盛んに供えて賑わっている廟の会期である。江蘇省吳江市墟鎮庄家劉王廟では、正月5日（伝統的な方法は4日の晩から始まり夜通し賛神歌を歌うが、近年は4日・5日の日中に行う）と8月22日（21日の晩に始め、22日の日中に賛神歌を歌う）に、浙江省嘉興市蓮泗蕩劉猛王廟では、清明（2月の場合は節日前日、3月の場合は節日後日）と8月11日から13日（13日が正式日）に行われている。上海市金沢楊震（老爺）廟（劉猛将が併祀）では3月28日と9月9日、浙江省湖州石宗太君廟（劉猛将が併祀）では正月11日と9月16日、江蘇省蘇州上方山廟会（劉猛将が併祀）では3月28日と8月15日にそれぞれ行われている。

これらの中で正月期間が最も頻繁であり、春期の劉猛将祭祀は一月から清明節後まで延長することもできる。正月13日は劉猛将の誕生日とされており、この前後期間の祭祀は最も賑やかなものとなっている。浙江省と江蘇省の境にある蓮泗蕩（現在の嘉興市）の劉王廟は信仰の中心でもあり、毎年清明節に劉王廟会が行われる。網船会とも称し、漁民がそれぞれの「香会（社）」組織を持っている。一般的に廟会の10日前に開催案内の連絡が四方に届けられ、船で生計を立てている人々が蓮泗蕩に集まる。その数は数千隻にのぼり、王江鎮まで十余里の列を成す。会期は3日間で、数万人が嘉興市各地区の廟会を廻る。各会では香棚を設けることができ、希望する自己の香会祭祀を盛大に行い、互いに誇示し合う。

秋期の劉猛将祭は「青苗会」或いは「青苗社」と呼ばれている。清袁景澜《吳郡岁华纪丽》に

は「中元节候，田事耕耘甫毕，各醖钱设牲醴，迎赛猛将神，鼓乐酬饮，四野插五色纸旗，以驱飞蝗，谓之青苗会。」¹⁵とある。会期は一般的に3日間で、農家では「猛将命書」と呼ばれる色とりどりの三角形の紙製の旗を差込み、最終日には「出会（或いは走会）」として猛将をかついで巡る。

劉猛将信仰の祭祀儀式構造は中国のその他の民間信仰と同様で、「請神（神を招く）」―「酬神（神をもてなす）」―「送神（神を送る）」の三段様式である。違うところは、劉猛将の信仰儀式では賛神歌の歌手が主催することで、彼らは神司の役割も兼ねる。

その中で「酬神」の内容は最も多種多様である。各地方の文献記載を見ると、清代民国時期、毎年春期猛将祭と青苗会で慣例的に各地独特の舞踊や雑技、武術演技が必須とされていた。神歌手は賛神歌を歌い、猛将宝巻を読みあげ、請草台で神をもてなす芝居もおこなう。例えば江蘇省昆山には「水陸猛将会」というものがかつてあり、陸上の活動とその他地方は同じで、水路では乗船し、船上で各種の武術や雑技を演じる。また、平台山の猛将祭祀活動は7日間で、一日目は各地の漁民が集会を行い、4隻が先行して漁民の貢物を廟に運び、祝辞を並べる。二日目は神を起こし、供え物をして神を招く。三日目は主祭で、劉猛将を祈祷し、「猛将神歌」を歌う。四日目は午後と夜に神をもてなす演技をおこなう。そして六日目の午前に猛将像をかついで平台山周辺の島を一周する¹⁶。

筆者がここ数年に行った調査では、今の猛将会でも依然として猛将神歌が歌われ、猛将宝巻を読みあげ、龍舞など各種の表演が行われている。神像を担いでめぐることは劉猛将において極めて特色的な活動であり、2004年に江蘇省呉江市横扇鎮輪牛村照家港自然村から最初に回復した。

筆者が2007年8月21日に参加した活動について紹介する。照家港劉王廟はあまり小さくなく、2棟の低い家屋の間に一本の小道が通るシンメトリー構造で、赤い瓦に白い壁でできている。東側の一間には老劉王と大小四つの劉王の像があり、西側一間には村人専用の焼香台がある。言い伝えでは照家港には元々劉王廟はなく、清代の嘉慶・道光年間に太湖洞庭東の西山で糞を買って堆肥としていたが、その際付近の劉王廟で焼香して劉王を非常に崇拝する心理となり、そこで劉王と他の二体の神像をこっそりと村まで運び、これから照家港の劉王が始まった。劉王が村に来たこの日が陰暦の7月9日だったため、毎年この日に廟会を行うこととなった。1955年に照家港では劉王の巡会をやめ、毎年陰暦の1日と15日に焼香して祈ることのみおこなった。文化大革命の期間、照家港の劉王廟は除かれ、全ての劉王廟会に関する活動は停止した。1998年から1999年に老劉王と大小四つの劉王の像が作られて劉王廟も再建された。2004年には劉王の巡会活動が復活し、その費用は村民の寄付で賄われている。

劉王廟の北側には大きくはない土地があり、調査した日には臨時の勅倒庁（現地俗称、テントに似たもの）が立てられた。南側のものは表演用で、北側のものは4体の劉王を祀るものである。赤色の神輿荷一列に並び、神輿の上部に赤い神傘には2匹の金色の龍が刺繍されており、正面部には「上天王」の金文字がある。3体の10数mの長龍が左右にあり、龍旗や彩旗もある。

午前は祭祀活動で、お昼ご飯後に出巡が始まる。爆竹の音の後、何人かの白シャツを着た老婆

が群衆から出てきて劉王像たちの前で拝んでから、神像の後ろに回って敬いながら神像をそばの赤い神輿に移動させ、位置を調整し赤い反物で固定させる。十数人の青年がゆっくりと神輿を担ぎだし、その他の十数名がどらと太鼓役を担う。中年女性と老婆が3体の長龍を起こし上げて太陽の下で翻すと、一面の金色の光沢を発する。

午後1時半ごろ、劉王巡会が正式に開始となる。どらと太鼓の音の中、四面の龍旗（長さ約2m）が先導し、どらと太鼓隊が随行して、その後に彩旗がはためき続く。老劉王の神像は神輿の中に鎮座し、4人の青年にゆっくり担がれる。劉王像はどらと太鼓隊に従い、続いて青赤の龍が空を舞い、金色の龍が巨大な赤い龍珠を追う。長龍の後を色とりどりの小旗が巨龍の姿を映し出す。これが老劉王の巡会方陣である。後に続く劉王もこの方陣をとり、劉王の神像も4人の青年に担がれ、後ろには高く空を舞う黄緑色の長龍が続く。更に後ろには小劉王と別の村から来た劉王が続き、龍旗の護衛と長龍が付き添い、各色の彩旗を取り囲んでゆっくりと進む。どらと太鼓隊の4人の青年は村人と順序良く整列して続く。往年の慣例により、論牛村に属する3つの自然村内（除く照家港外、盛家港および常家所）を2～3時間かけて歩く。隊列は民家の門ごとに爆竹を鳴らされ出迎えられ、場所によっては門の前に供物卓も設置される。ある家庭では隊列が門前や部屋で休息できるようになっており、主人が果物やお菓子を準備する。しかしこれは事前に組織の者と協議することが必要とされる。それはこれがとても栄誉なことで、その家に幸運や財がもたらされるものだからであり、「留福」とも呼ばれる。

隊列はこれらの方陣と秩序によって村の主要道路を午後4時過ぎまで廻ったあと、劉王廟に戻る。廟で再び村人たちが神輿から厳かに4体の神像を出して神卓に戻すと、出巡活動は終わりを迎える。現在の状況を見ると、出巡活動は以前の規模にはまだ及ばないが、参加している村人の熱意はとても高く、今後は規模を次第に拡大していくだろう。劉王廟でおこなわれるこの一連の表演様式は、独自の表現および民衆の劉猛将への信仰観念によって形成された闘将の叙事システムである。

祭祀儀式と文芸叙事は相互継承するものである。これによって民衆の劉猛将への信仰行為を不断に強化され、ひとつの完成された信仰伝統を構成するのである

3. 劉猛将信仰の賛神歌

現在の調査状況から、劉猛将廟会期間に歌われる賛神歌は不可欠なものであり、賛神歌とその歌い手による演出は重要な位置を占めていることが見てくる。

賛神歌を歌うことは個体的な行為ではなく、一種の組織的集団行為である。当該地域には如旗傘社、朱家社、七牲社などの「〇〇社」と命名された民間信仰組織が多くある。廟会はそのそれぞれの社の構成員による集団行動の場であり、歌手も所属メンバーであるが、実際には「指導者」として活動計画を担当する。筆者たちが調査した廟会（芦墟劉王廟、嘉興蓮泗蕩劉王廟）では、毎回5～6支隊が参加して賛神歌を演唱する。例えば、芦墟劉王廟は比較的狭く、廟内の本殿と左右の建物には3～4の演唱隊のみしか配置することができず、そのためその他の隊（主に外部か

ら来た隊)は廟外で停泊している船の上(神像、供卓なし)で演唱するか、あるいは廟近くの農家を借りてその中で演唱をおこなう。

これらの民間組織は規模も歴史も様々であるが、その中で芦墟の「旗傘社」は長い歴史と当地での比較的高い名声を有している組織である。旗傘社の構成員は沈氏一族(現在は拡大)の血縁関係による民間信仰組織である。沈一族について紹介すると、彼らは漁業によって生計を立てており、賛神歌を9代にわたって演唱してきた(ただし現在8代までしか推測できていない)。彼らは司令旗と大傘を標識として毎回廟の門口に大きい司令旗と傘を提示することから、旗傘社と呼ばれる。毎年、旧暦の正月4日、3月1日、3月25日、清明節、7月15日、8月12日、8月21日、重陽節などに社内メンバーや自己所有の船、あるいはタクシーで各廟会の劉猛將祭に出掛け、賛神歌を演唱する。あるときには村人からの誘いを受けて民俗活動にも参加する。演唱するのは「劉王老翁」や「七老翁」などで、これらは教本はなく、完全に口頭で伝授される。今の歌手は沈天生(1933生まれ)沈毛頭(1936年生まれ)兄弟で、彼らはそれぞれ歌唱隊を率いている。各歌唱隊には基本5〜6人の固定歌手と数人の控え歌手がいる。

沈毛頭による彼ら一族の賛神歌の伝承状況は次のようである。第一代:沈仏昌、第二代:沈劉高、第三代:沈玉堂、第四代:沈万正、沈万葉(兄弟)、第五代:沈進高(沈万正の子)、第六代:沈老虎、沈小弟(兄弟)、第七代:沈天生(沈老虎の子)、沈毛頭(沈小弟の子)(兄弟、他に沈瑞生、沈根生、沈金生、沈福生と兄弟がいる)、第八代:沈仏忠(沈天生の子で歌うことができる)、沈天林(沈毛頭の子で現在まだ歌えない)。

旗傘社の規模は、沈毛頭とその父親によると当時の蓮泗蕩の劉王廟72班(72の「劉王伝」神歌グループ)では第一で、沈家では第二であり、当時旗傘社は300戸以上の構成員を抱えていた。沈金生の紹介によると、現在の旗傘社の構成員は2000戸以上と発展しており、分布範囲はとても広い。江蘇省呉江市範囲では芦墟鎮が中心で、金家、北庫等も含む。浙江省は嘉善市の陶庄、大舜、姚庄、洪溪、西塘、嘉興市の新巷里などである。分布地域が広範囲で組織としては不便なため、いくつかの構成員は新しい「社」を形成していき、旗傘社の分社が成立してきた。例えば、2006年2月1日(正月4日)午後に芦墟劉王廟に来ていた賛神歌の演唱隊は浙江省嘉善丁柵鎮漁村の「朱家社」で、主要歌手は朱金福(81歳)と朱福興(58歳)である。彼らによると、元々は旗傘社の構成員だったが、朱金福が鎮老虎に弟子入りし、その後独立したという。このようなことは沈毛頭と沈金生によれば比較的良くあることであるという。彼らの唄い方は旗傘社の唄い方と基本的には同じであるが、歌調には違いがある。

このことからわかるように、賛神歌歌手の役割はただ演唱するだけではなく、民間信仰組織を組織するものとしてその組織の中で比較的高いものとなっている。このことも劉猛將信仰の特色の一つであり、廟会には通常は統一的な祭祀活動はないが、各民間信仰組織は単独で祭祀活動を完成させる。賛神歌歌手は通常一族で伝承していき、多くの歌手が祭祀活動の中で熟練していき、歌手となるのである。

現地調査において、賛神歌の演唱過程と祭祀儀式は完全に一致しているか、または祭祀儀式が

賛神歌の進行に沿って進められている。賛神歌の演唱活動過程はだいたい祭神、賛神、送神の三つに分けられる。

A. 祭神（儀式のみ、演唱なし）

準備、お供え、祭拝の三つを含む。社の構成員が会場に到着後、持ってきたお供え物を供台に分別（魚、肉、お菓子、果物等）して置き、その後香を供えて神様に礼拝する。集まった供え物は一般的に歌い手の家の中に社旗とともに置かれ、毎回彼が廟まで運ぶことを担当する。

B. 賛神（賛神歌の演唱が主、一定の儀式が伴う）

祭拝の後、賛神歌の演唱が開始される。請神、安神、賛神の三つの過程。請神は通常上・中・下界の108神を招く。安神は招いた神を決まった場所に鎮座し、神界の等級観念を体现する。賛神は神歌の主体部分で、神の身上と偉業を賛美する叙事歌を演唱する。

C. 送神（儀式と神歌演唱が同時進行）

送神では招いた神々を元の場所にする。神歌演唱の最後の部分がこの送神である。歌手が送神を演唱する半ばほどに、他の構成員が廟外の広場で松明を焚き、神銭や金銀元宝等を燃やし、供卓上の供え物を撒く。演唱が終わる時には供え物も撒き終わる。その後、全員で再度神に向かって拝み、全ての活動が完了する。

芦墟鎮や蓮泗蕩の劉王廟の状況から、賛神歌の演唱はパートに分けて進行される。1パートは約1時間程でそれぞれ一人の歌手が担当する。10分程の休憩ののち、次の歌手が演唱する。祭神、賛神、送神で分けられるが、中間の賛神部分は状況によって分けられることもある。

例えば、2006年2月1日（正月4日）の旗傘社の芦墟劉王廟での演唱は次のようであった。第1歌唱：沈毛頭（請神、約45分間、神ごとに肢体動作を伴う）、第二歌唱：沈金生（安神、1時間15分）、（午前9時45分に開始し2時間演唱後、11時50分に昼食、午後1時から再開）、第三歌唱：沈（張）六宝（女性、60歳、沈老虎を義父として沈に改性、嘉善西塘大舜郷の出身で毎回旗傘社の活動に参加、夫の王金財と一緒に来た）（賛神、劉王の出生及び青年期の生活を演唱、約1時間）、第四歌唱：張寿生（沈毛頭の姉の夫）（賛神、劉王の結婚から神になるまでの過程を演唱、約1時間）、第五演唱：（送神、約30分）。

沈六宝によると、「劉王伝」は7つの賛神部分の他に、請神、安神、送神を合わせた10の部分があるという。また沈毛頭は「劉王伝」を全部歌うには少なくとも48時間は必要だと言い、今回演唱したのは短縮版だという。請神を除いて、安神、送神は毎回必ず演唱される内容以外、中間部分は2セット歌うだけである。

神歌が演唱される際、多くは楽器による伴奏がおこなわれる。4人で編成される歌隊では、主要歌手が歌いながら小さいドラを鳴らし、その他の三人は太鼓、ドラ、シンバルを鳴らす。歌詞は7字が基本で、「ドンチャンドンチャンドンドンチャン」と演唱される。ただし狭い場所や人員が足りない場合などの特殊な状況では、楽器を使わずに参加者全員で声をかけて楽器の代わりとすることもある。

音楽的な視点から見て、長編神歌の主要な章はどれも民間歌謡の体裁であり、単調で変化の少

ないリズムがひとつで比較的簡単に朗詠できる。彼らは神歌を「演唱」と言い、「唱える」「詠む」とは言わない。歌の中にある祈祷詞や梵語の類のみ唱え、謹直で変化が乏しい。ただし歌手や参加者に関わらず、皆とても敬虔であり、特に歌手は聞いている人が誰もいない状況でも演唱は整然と行われる。これは、彼らが演唱は神に捧げるものという信念を持っているからである。

賛神歌の演唱中、我々は歌い手がただの歌唱者ではなく、神と人の仲介者の身分として存在する様子を見ることができる、請神の際、各種の神を招いて祭儀に参加させることを担当し、賛神では猛将神歌を演唱して神の数々の事績を宣伝し、送神では送神を演唱して全ての神を元の場所にお送りする。「請神—賛神—送神」の順序で演唱され、同時に相応する祭祀行為が行われるが、他の行為で代替したり、順序変更や重複することはできず、一般人に請け負わせることもできない。同時に、驅蝗神である劉猛將廟には専門の神事職員はおらず、祭祀活動における統一された組織メンバーや祭祀儀式もない。また、それぞれの「〇〇社」と命名された民間信仰組織は単独で進行されており、前述したように、それら民間信仰組織中の歌い手が組織の中で祭祀活動の組織者となり、祭司、祝司など神職の役割を担うこととなる。このことより、賛神歌を演唱することは祭祀活動の中において欠くことのできないものとなっているのである。

写真資料

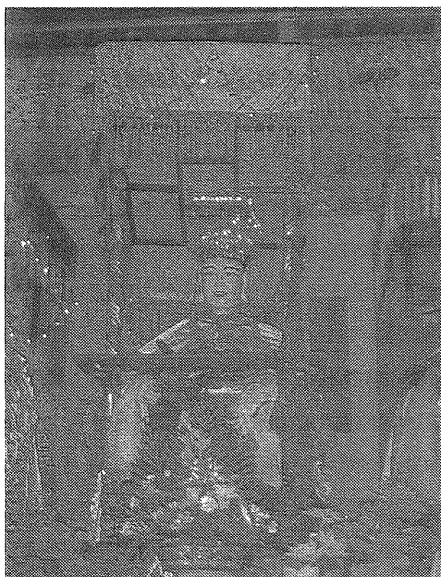


図1 浙江省嘉興市蓮泗蕩劉猛將像



図2 江蘇省芦墟鎮庄家劉王廟劉猛將像



図3 蓮泗荡劉王廟及び清明廟会
(2007年4月15日撮影)



図4 江蘇省芦墟鎮庄家劉王廟及び秋季廟会
(2007年10月3日撮影)



図5 江蘇省吳江市横扇鎮論牛村劉王廟



図6 廟内での賛神歌演唱の様子



図7 廟付近の租借先農家での演唱



図8 自家船上での賛神歌演唱

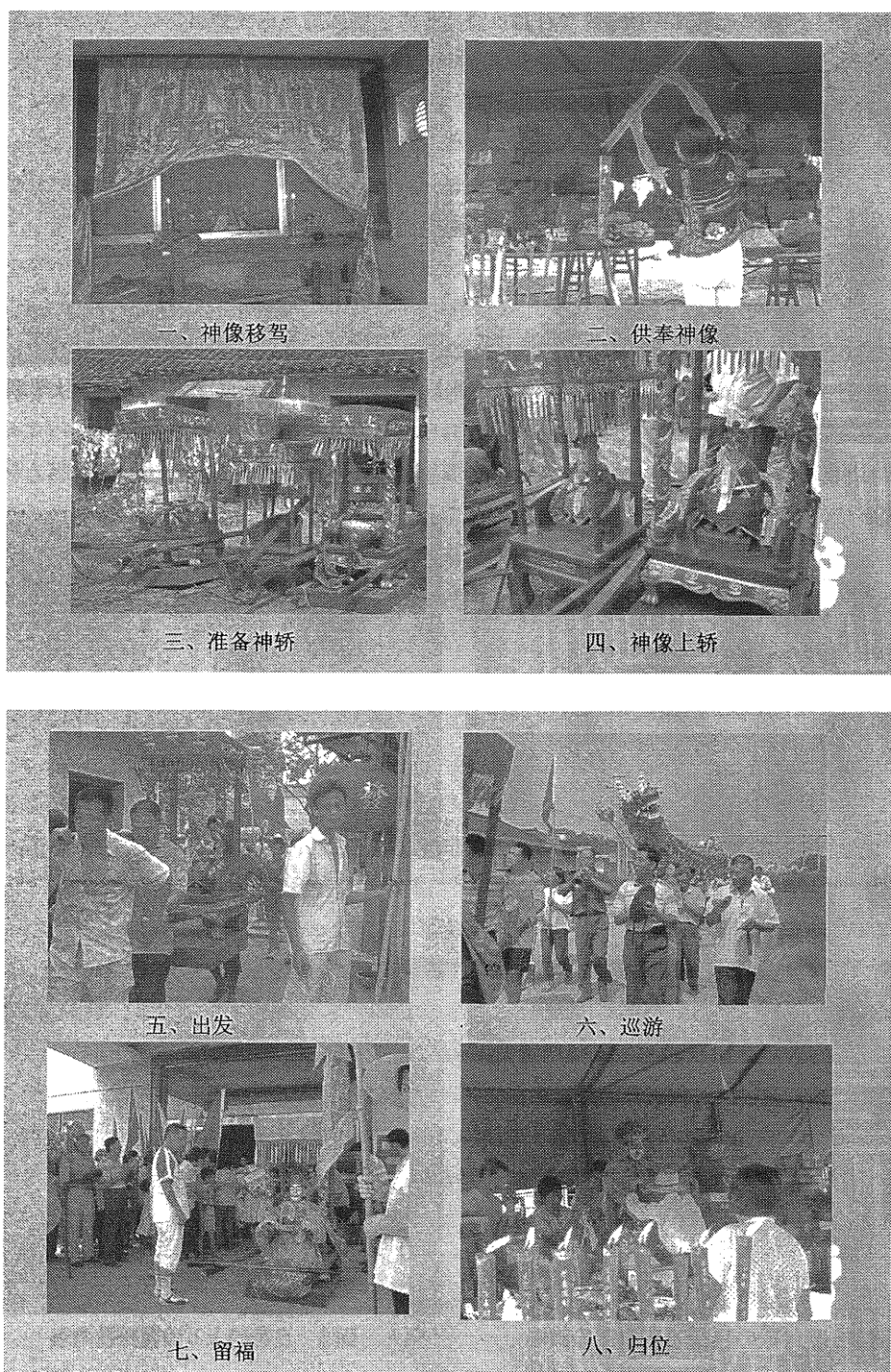


图9 神像出巡过程

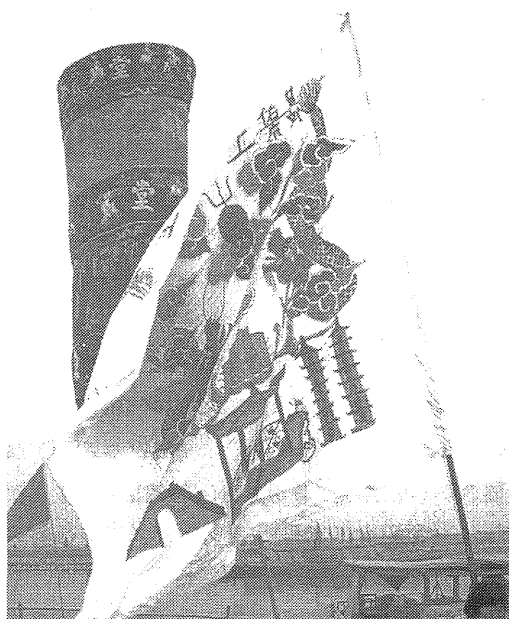


図 10 旗傘社標示

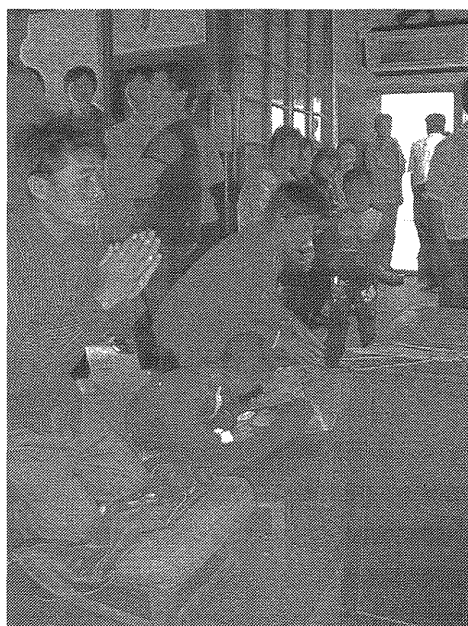


図 11 演唱前の祭神

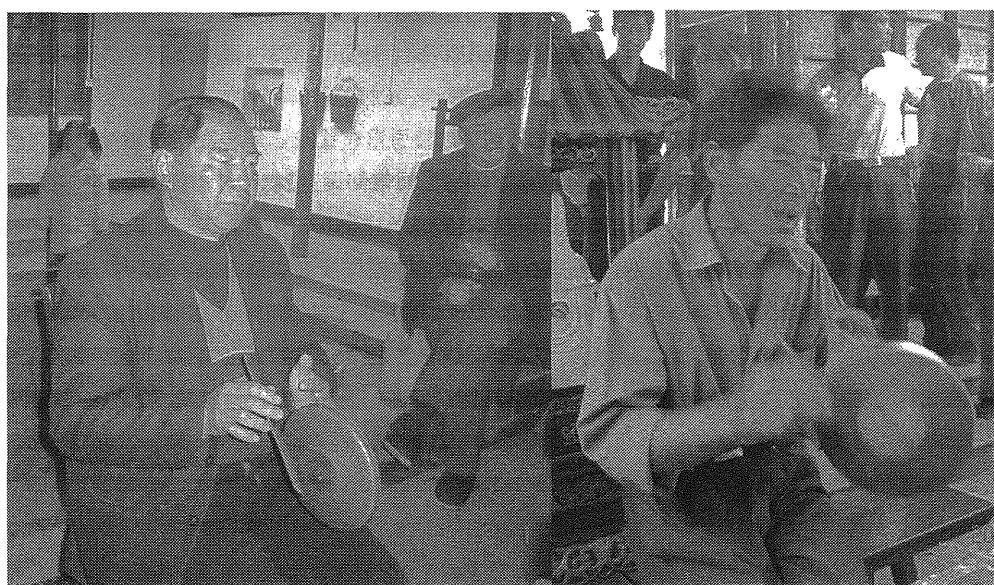


図 12 演唱する歌い手

注

- ¹ [清]袁景澜《吴郡岁华纪丽》，江苏古籍出版社，1998：27
- ² 《宋史》三三六卷，中华书局版，10757
- ³ [清]顾震涛撰《吴门表隐·卷一》，江苏古籍出版社，1999：5
- ⁴ 《宋史》四四九卷，中华书局版，13239
- ⁵ このことについて、[清]袁景澜《吴郡岁华纪丽》，江苏古籍出版社，1998：28の中で考証分析がなされている。
- ⁶ 《宋史》四四六卷，中华书局版，13162
- ⁷ 《宋史》四〇一卷，中华书局版，12167
- ⁸ 周正良《驱蝗神刘猛将的来历和流变》，载《中国民间文化第五集·稻作文化与民间信仰调查》，学林出版社，1992：18-19
- ⁹ 例えば、江蘇省には次のような伝説がある。
「刘猛将的传说」<http://61.155.22.86/showContent.aspx?id=30264>
- ¹⁰ 王稼句点校、编撰《苏州文献丛钞初编》（上），古吴轩出版社，2005
- ¹¹ 乾隆十二年（1747）敕修《清朝文献通考》卷一〇五。转引自车锡伦、周正良《驱蝗神刘猛将的来历和流变》，载《中国民间文化第五集·稻作文化与民间信仰调查》，学林出版社，1992：5-6
- ¹² 光绪《永年县志》卷十，转引自车锡伦、周正良《驱蝗神刘猛将的来历和流变》，载《中国民间文化第五集·稻作文化与民间信仰调查》，学林出版社，1992：5
- ¹³ 《将军庙碑记》
- ¹⁴ [清]刘锦藻《清朝续文献通考》卷一五七群祀一，转引自车锡伦、周正良《驱蝗神刘猛将的来历和流变》，载《中国民间文化第五集·稻作文化与民间信仰调查》，学林出版社，1992：6
- ¹⁵ [清]袁景澜《吴郡岁华纪丽·卷七》，江苏古籍出版社，1998：240
- ¹⁶ 车锡伦、周正良《驱蝗神刘猛将的来历和流变》，载《中国民间文化第五集·稻作文化与民间信仰调查》，学林出版社，1992：12-13